

中越大震災に遭遇して



平成 17年4月23日

長岡老いを考える会



## はじめに

「人生80年」を聞いてすでに久しくなりますが、その80歳を超えた中越地域の長老のどなたもが、昨年1年間の天災に関しては「生まれて初めて」とおっしゃいます。

40度を越した猛暑、大型台風の度重なる通過と直撃、それに伴う水害はついに人命をも奪ってしまいました。

そして10月23日の中越大震災です。まさに古老をして「生まれて初めて」と言わしめた大災害でした。

10年前の阪神淡路大地震と比べて、死者の数の少なさを以って「大した事ではない」と書いた雑誌があったと聞きました。

人がその生業（なりわい）を続けていく基盤を失うことの痛手は、これからの生命をどう維持するかに関わる大変な事柄です。家を失い、田畑を失った私たちの仲間は、転職や家移りで明日を生きぬけるサラリーマンではない人々が多いのです。

さて、あれから半年、災害当時に受けた諸々の被害はまだ完全に元に戻ってはいないし、加えて肉体的、精神的な後遺症も様々な形で顔を出します。私たちは、その後の数千回に及ぶ余震に怯えながらも、今少しずつ以前の生活を取り戻しつつあります。

このような日々の中で「長岡老いを考える会」の仲間たちは、生涯に二度と経験したくない事ではあるけれど、このことを今恐怖の覚めやらぬうちに書き留めておいて、子や孫に伝えたいと思い始めたのです。

あまり時間のない中で集めた文で、個々人が思いの丈を書ききれなかったかも知れませんが、故にこそ飾らない生（なま）の声と受け取っていただきたいと思います。

同日同時刻にそれぞれがどう行動し、何を感じたか、その後の様々の対応対処の仕方が、後日の子供や孫たちへの示唆となって欲しいと念じています。

平成17年4月

長岡老いを考える会 平石 京



平成16年 中越地震その時私は

浅井 ヒデ

その時私はキッチンにいました。異様な物音と同時につき上げられる感じがして、グラグラと揺れ出した時“地震だ！来た！”と思いました。

キッチンから母のベッドへ走り出した時電気が消え、その消える光の中にガラス戸棚の中の何か白い物がひどく揺れている……、それを目の端にとらえて、暗闇の中で母のベッドにひざまずき、しっかりと布団の上から母を抱きました。その姿勢のまま、地鳴り、突き上げ、グラグラ揺れ続く中の家のきしむようなさわがしい音。その揺れ方は、くり返し突き上げ、横揺れ、斜め、と、さまざまでした。長い間でした。

後で知ったのですが、本震の後、余震が絶えず続き、30何分か中越地方を襲っていたことを……。

戸外に出ることは考えませんでした。このことはかねてからの私の覚悟でした。

火災、水難、地震、どんな場合も「介護度5度」の寝たきりの母を、この家から助け出すのは、私の力では不可能なこと。何事も“運を天にまかせ”決して母を一人にしない、傍を離れないときめていました。

唯々一刻も早く地震の止むことを祈りながら、母を抱いていました。

余震が少し静まった時、急いで手さぐりしながら玄関に行き、靴をはき、土足でキッチンの様子を見ました。ガラス戸棚は倒れずあり、ガラスや器物の割れもなく、部屋のタンスも立っていました。そのまま部屋に戻り、机に置いた腕時計を手さぐりすると、すぐ下に落ちていました。腕にはめ、又玄関に行き、ドアの開閉をたしかめると、開きました。縁側のガラス戸も開けてたしかめました。

戸外は人声も聞こえず、人影もなく……、“静かだな”と思いながら、再び揺れる中を母のベッドに戻りました。(まわりの家々もくろぐろとありました)

この後7時頃、思いがけず市内(希望が丘)に住む妹の夫と甥が、車で迎えに来てくれて、私たち二人は、揺れる家から逃れたのでした。ガスの元栓を締め、電気のブレーカーを落とし、お隣に避難することを知らせて……。

しかし母は、車の中に居ることに耐えられず、日付の変わる頃入院しました。

県外の身内に、こちらの無事を知らせたのもこの頃でした。

母の検査は深夜までかかり、その間、病院の救急入り口のベンチに毛布を借りて、寒さをしのぎながら待ちました。次々と切り傷、打撲、その他さまざま患者が来ました。心臓発作の人も小千谷から搬送されて来たり、テレビの取







回りの利くバイクで職場へ向かって行った。

停電で、テレビも電話も使えないし、携帯電話もつながらず、携帯ラジオからの情報だけが頼りだった。とにかく避難所に行けば何か情報が聞けるのではないかと神田小学校の体育館へ行った。(※指定避難所の新町小学校の体育館は改装中) しかし、すでに館内は人があふれ、校庭は車とテントでいっぱいだった。嫁と孫たちを残し、わたしたち夫婦は家に帰り、車の中で過ごすことにした。家への帰り道で見た月の光は異常な色で、不気味に輝いていたのが頭に残っている。

夫が真っ暗な家の中から手当たりしだいに、毛布や湯の入ったポット・ホッカイロなどの役に立ちそうなものを持ってきた。これで何とかなる、と周りを見渡すと、すぐ傍の電柱の上のトランスが地震で動き、強い余震がくれば落下するのでは……、と不安になり、急いで移動させた車の中で眠れぬ一夜を過ごした。

24日11時過ぎ、避難所から朝食として、一人につきおにぎりかパン一個、水は一家族にペットボトル1本をもらったが、食欲はなく食べられなかった。

屋近く、寺泊に住む夫の姉が、あつあつのおにぎり・パン・水・その他食料品・日用品を届けてくれた。その温かいおにぎりのうまかったこと。あの喫茶店でのケーキ以来の食べ物だった。夕方には神奈川県の藤沢から磐越周りで、妹夫婦が援助物資を届けてくれ、なんとか食べ物には困らなくなった。でもライフラインは止まったまま。そしてこの晩も車の中で過ごした。

翌25日早朝に、浅井さんが尋ねてきてくれ、お互いの無事を喜び合った。食器が壊れた話をすると、お昼過ぎには、「当座のものをね」、と8人分の食器を届けてくれた。ありがたくって、うれしくって……。また、午後4時過ぎには、待ちに待ったライフライン、ガス・水道・電気 同時に復旧し、久しぶりに風呂に入り、ご飯を炊き、浅井さんから頂いた食器で家族そろって食事をした。幸せだった。

その後、食器は、高野さん・沼さんからもたくさん届けてもらい、今、ありがたく使わせてもらっている。

#### ○その後わたしは

地震以来わたしは、グラッとくると心臓がどきどきし、息苦しくなってしまう。家の中にいるのが怖くて4~5日は玄関の上がり框に座り込んでいる時間が多かった。台所の瓦礫の片付けは、休校中の孫たちが普段はなにもしないのに、こんな時は、黙々と手際よく片付けてくれた。やらなければならない時はやる、ということを得ていることがわかり、感謝と同時に安心もした。

息子夫婦は職場が震源地に近いせいもあり、早朝から遅くまで働いて帰って

くる。その間孫たちを預かっている責任の重さ、息子たちが帰ってくるとホッと肩の荷をおろす日が何日か続いた。

お見舞いの電話や援助物資、思いがけない人たちからもたくさんもらった。本当にうれしく、ありがたかった。

そして、わたしはいまだに心臓のどきどきは続き、震度1の揺れでも息苦しくなり、安定剤半分を飲む日が続いている。

#### ○今後に思う

わたしたちの町内では地震に関する情報はとうとうひとつもなかった。ましてや安否確認もない。お隣の一人暮らしの87歳の女性が「地震の時あんたんこのお兄ちゃんがすぐに飛んできてくれて、大丈夫かねと声をかけてくれてありがたかった」と、言っていた。町内会とか、コミュニティーセンター単位で、身近な情報の伝達が出来ないものだろうか? 例えば選挙の時の棄権防止を呼びかける広報車で、何時、何処に給水車がくるとか、おにぎりの配布があると言うように……。

メディア時代のありがたさも感じた。リアルタイムに放映されるテレビのおかげで、疎遠になっていた友人、知人から電話や援助物資をたくさんいただいたこと。当たり前前の生活のありがたさなど、この地震はこれからの人生にいろいろの教訓を残していった。





## 地震に寄せて

猪俣 英子

激しい揺れに何事かと、愕然とした。地震だった。

倒れ掛かる食器棚、一斉にとび出す食器類、これは大変な事がおきたと自覚し外へ出た。つかまった車と一緒に地面を何度もとびあがる程の凄い揺れである。

地続き一軒家に一人住まいの義妹をすぐ身元に呼び寄せ、息子は青葉台に独り住む叔父を迎えに走った。

幸いにも電気、ガス、水道が止まらなかったのも、明るい店内に近所の方々とともに集まった。恐ろしい余震が続く中、皆さんと一緒に居ることの有り難さ、励ましあって朝を迎えた。

午前2時頃、この春入社した孫が和南津トンネル前でテレビ中継する姿を見せてくれた、ときどきしながらも私どもの気持ちにあかりを灯してくれた。

足の踏み場もなく散乱した家中、鉄骨住宅と木造住宅の継ぎ目が離れて、二階の床が落ち、目を覆うばかり、魔物が潜んでいるようで恐ろしい。とにかくリビングを片付けて、五人で寝起きする。幸い店には、機械其の他は稼動出来たので営業に支障なく何よりであった。

6時間おきの腹部透析をしていた義弟が82歳の高齢であり、今迄スムーズにやっていたことが、首をかしげたり、理解出来なくなってきた。落ち着いてゆっくりと家族で手伝い乍ら一回一時間かかる作業が続けたが、義弟には衝撃が大き過ぎ、頭が真白になり、眠ろうとせず、食事もとらず、変なことを口走り行動も目が離せなかった。急遽入院が決まり一応ホッとした。

刻々と被害が報ぜられる中、激しい余震もあり、一日一日をどうして過ごしたか思い出せない。気持ちは落ち込むばかり、病人は腹部透析から血液透析にする為の手術に失敗、一生懸命励まし続けたが病状は悪くなるばかり、2月3日急変他界した。治療にあらゆる力を注いで下さった病院の方々に感謝の気持ちでいっぱいだった。葬儀一切、実弟夫婦、息子夫婦がやってくれたが、まだまだやる事が山積して、先は長い。

義妹の家も柿川浴いで全壊し、クローバーハウスに頼み込み二人部屋の半分に住まわせて貰っている。ケアハウスしなのに申し込んだが抽選とのこと、どうなるかわからない。

親しくお付き合いしている山古志のMさん宅が、新築数か月で水没の惨状を知った。夫妻で尋ねて来られ、息子たちと抱き合っ泣く姿は辛くて見ていられなかった。仮設住宅から復興へと力強く立ち上がって、懸命に明るく働かれる様子を心より応援したい。

地震発生以来、各地のお客様や親戚より、お見舞いの電話やら心のこもった品々、お見舞金等々が届けられ、ただただ有り難く感謝あるのみ、真心と勇気をたくさん頂いた。そして学ばせていただいた。

どこかできつとお返しをと念じている。

## 中越地震に遭遇し

小野塚江美

観光ボランティアガイドの研修会も終了し、迎えの車で郊外の大型店（ランドウ）に一週間分の買い物に出かけ、買い物を済まし、二階の屋上駐車場近くのエレベーターを降り、五・六歩カートを押して歩いた所で、突然ゴート、音と共に大揺れが続き出口の硝子のドアが大きく膨張し破裂寸前になり、危険を感じ思わずカートを放してしまい、近くの展示品棚に揺れど、揺れの強さに棚が動き出しあまりの怖さに遂に手を放してしまい、フロアの真ん中まで弾き飛ばされ……背中と腰を強打される、身動きも出来ず、次々に起きる余震に体を横たえ痛み堪えている所に、店員の人達が助けに来て下さり、主人の待つ車まで運んで下さるが、店灯も消え、信号機の灯も消えた国道の交差点は、まるで索漠とした、テキサスの街角を思い出させ、余震に揺れる異常な感じの町を通り漸く病院に運んでもらう。病院も停電で自家発電とか、エレベーターも止まり次々と運び込まれる怪我人を、男性職員らが四人がかりで車椅子を持ち二階のレントゲン室まで階段を上がって運んで下さり、申し訳なく恐縮するが、レントゲンを撮り打撲と診断されて帰宅すれど、家にも入れず、車の中で一夜を明かす、激痛に耐えられずライフラインの無事だった、長町の娘の住むマンションに移り、四・五日過ぎすが益々痛みが強くなり、我慢も限界と病院に連絡し早速の再診察で脊髄12~13番が圧迫骨折で絶対安静にするようにと外科医に注意され、一週間後に漸く頑強な厳ついコルセットが出来上がり骨髄ガードしてくれて、生きた心地になるが二ヶ月ぐらいは、何時元氣になれるのかと、悪夢を見ているような胸中でした。

雪消えと共に薄紙を剥ぐ如く背骨の痛みも和らぎ身の回りのことも出来るようになり……健康の有り難さを痛感しているこの頃ですが多くの知人や友人に励まされた、四ヶ月間はパワーを頂き心の支えになった日々を感謝する毎日です。

### 短歌

エレベーター降りたフロアで遭遇す大型地震の凄まじき怖さ  
錠り付く陳列棚も倒れかけ振り飛ばされて身動きならず  
骨折の長期静養に閑々とベットに横たえ新年迎ふ  
枕辺に嫁の備える車椅子気遣う人の心嬉しも  
災害後手足となりて日々過ごす器具との別れに感謝を込めて  
五月過ぎ自室に入れどジュータンにガラスの破片未だ潜みて  
日に二度のポストに入る郵便に春の誘いの催しの多し



## 新潟県中越地震を体験して

小野塚ハツイ

平成16年10月23日午後5時56分我が家にとっては珍しく早い夕食が終わろうとしていたその時、私の右肩にオーブントースターが、ドスンと落ちたとたんガタガタと大きな横揺れ、家族手分けで台所の家具を支えた。長時間の揺れ、余震で怖さと不安がよぎり一時はその場を動けず、じーっと・・・、玄関の戸を開けて、その後はキャンプ用のランプを付けて携帯ラジオをテーブルの上に、一晩中ラジオ放送に耳を傾け一夜を明かした。

隣近所は皆小学校へ自主避難をしました。我が家は一步も外には出なかった。息子だけは地域の消防団員ですぐに出動して三日三晩家には帰らなかった。翌日近所の友達や、家の前を通って避難所に行く人々に、我が家だけ避難所に行かなかったので行って食べ物を貰ってくればよいと言われ、行って見たら避難所に行ったものに一個だけ与えられるとのことでパン一個を貰った。家に一人病人がいるのですけど、と言ったけど、来なければ上げられないと言われ帰ろうとしたその時、近くに居た人があそこの方は歩いて来れない人なんだからと言われたら、渋々ではもう一ついいでしょうと言われて菓子パン合計二個を貰って帰った。その後は二度と行かなかった。

避難所に行った人はそこで食べ物が与えられているのに、行かない者には何も与えられない。もし一人生活であったり、体の自由が思うようにできず避難所にいけないでいたら援助を受けることが出来ないのか・矛盾・不平等。地域全戸のライフスタイルが止まっているのに、井戸があっても電気がなければポンプは作動しない。電話も不通となる。現代社会の文化生活ではトイレも使えない。これが4-50年前だったらこれほど不便を感じないでいられたのではないかとつくづく思った。

川口7、小千谷6強、長岡6弱の震度で始まり一夜明けでも続く余震、一ヶ月たっても、二ヶ月たっても、時間が経過するにつれ震度は弱くなっているものの余震は続いています。(23日は本震を含めて164回。24日は153回、一ヶ月で800回にも及んだ余震)。台風、水害、地震と天災の多い年でした。

情報豊かな現社会で全国各地からの団体、個人と多くの人的ボランティアとして、心のケア、救援物資、義援金、などが寄せられ、人情と行動力の尊さを感じ、助け合いの精神に感動いたしました。身近な地域では、災害を経験し地域での助け合い運動を密にするにはどうしたらよいかを考え、話し合うことの大切さを痛感しました。

## 中越地震

風間 よき子

忘れもしないあの日、10月23日午後5時56分突然「ドカーン」と突き上げるような衝撃、続いて激しい揺れ、ガス台の小鍋の湯は落ちてくる。咄嗟にガスを止める、ストーブを止める。隣の部屋で一人遊びの孫は、「ワー」とすごい声で泣いて飛び付いてくる。(娘親子は、糸魚川市よりたまたま来ていた。)電気は消える。みーんな一度に襲いかかる。孫を抱きかかえ急いでテーブルの下に潜り込む。「ママ」「ママ」と泣き叫びおびえる孫に「大丈夫」「大丈夫」といい続けながら、覆いかぶさるようにして抱き締めていた。二度三度と続く激しい揺れに、身動きもできない。二人必死で恐怖と戦っていた。

少し落ち着いて来ると私の帰宅(高齢セミナー:当日で出席した)といれかわりに車で用に出た娘のことが心配になる。間もなく娘があわてて帰ってきた。

家を出てしばらく走っていると一瞬事故かと思ったほどの衝撃、車を止め地震だと察した。そこからは無我夢中、無事帰宅できた。孫は、しっかりママに抱きつく。

間もなく隣家に人が「皆公園(わが家の前)に出ているから」と迎えに来てくれた。暗がりの中、懐中電灯、傾いたロッカーから防寒衣を手探りで取出し外に出た。公園にはたくさんの人々が興奮しながら話している。町内の班長が各家庭の安否を確かめている。しばらくして「避難場所の上組小学校が受け入れ態勢にないのでこのまま様子を見る」との指示が区長よりあった。まだ余震は続いてそのたびに電線が揺れる。そして大地も揺れる感じだ。晴れた夜でよかった、月が美しく輝いて真っ暗でなかったが、初めて体験する暗く不安な恐ろしい夜になった。

上空ではヘリコプターの轟音、地上ではパトカーと消防車のサイレン、暗く寒い夜、大勢の人、そして話し声、幼い孫にとっては何もかも耐え難い出来事だろう。とにかく抱き締めてやるしかない。余震の合間を縫って家に走っては、防寒用の物を持ちだしてきて肩を寄せあって耐えた。緊張しているせいか夕食もまだだったことも忘れていた。隣近所みんな近くにいたことも心強かった。水害よりは、よかったかな、などと思ったり、話し合ったりした。

ふたたび指示が出たのは23時30分頃か、「避難場所はまだ受け入れ態勢が整っていないため、今夜は公園、空き地、自家用車等に自主判断で避難」との事。この時間帯になると一段と冷えが身にしみる。余震も小さくなってきているようだし、幼児もいるし、とにかく家に入った。幸い台所に続いた居間は壁にヒビくらいで難を免れていた。とりあえず炬燵布団など利用し防寒衣を着たまま、玄関の戸は開けたままにしてようやく横になったのは、翌日の午前1時近くだったと思う。

10月24日昼頃、娘の夫が糸魚川から実家のある田上町まで車で、そこからバイクに乗り換えて駆け付けてくれた。道路状況の悪い中早々に飛んで来てくれたと、感謝、感謝。カセットコンロ、予備燃料、飲料水、食料品、携帯ラジオ、懐中電灯、予備電池、おむつ、ホッカイロ等々、皆必要な品々。ようやく暖かい食べ物がおいしかった。

孫は、久しぶりのパパにも寄り付こうともしない。すっかり赤ちゃん返りのようになって、



玄関の戸は開けたままにしてようやく横になったのは、翌日の午前1時近くだったと思う。

10月24日昼頃、娘の夫が糸魚川から実家のある田上町まで車で、そこからバイクに乗り換えて駆け付けてくれた。道路状況の悪い中早々に飛んで来てくれたと、感謝、感謝。カセットコンロ、予備燃料、飲料水、食料品、携帯ラジオ、懐中電灯、予備電池、おむつ、ホッカイロ等々、皆必要な品々。ようやく暖かい食べ物がおいしかった。

孫は、久しぶりのパパにも寄り付こうともしない。すっかり赤ちゃん返りのようになって、ママから片時も離れようとしなない。これもトラウマなのだろう。今回の衝撃は大人でさえ受け止めがたい出来事なのだから、当分は無理と甘えを受け止めてやる。スキンシップが何よりの薬だと思う。翌日、娘一家に帰ってもらった。ようやく肩の荷がおりたようで、ホッとすると同時に何もする気になれない。お年寄りや寝たきりのひと、乳幼児など抱えている人のご苦労が思われる。

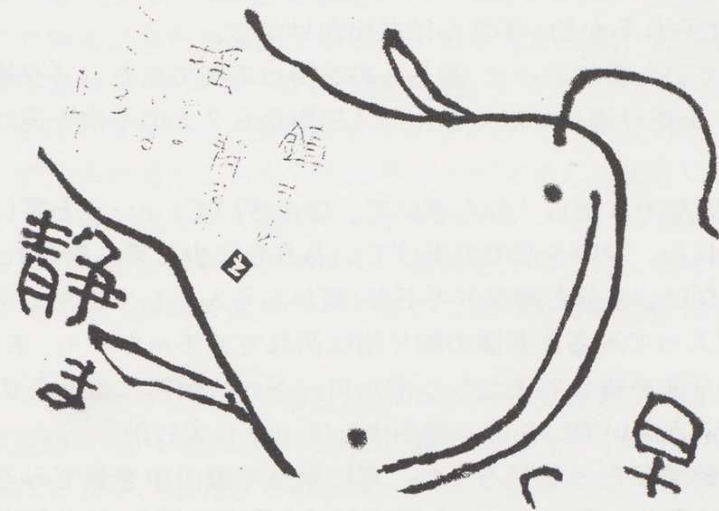
家の中を見渡せば、壁は落ち、家具、家具の中のものなどが倒れて、襖、障子もはずれている。特に二階は足の踏み場もない。地震が夜中だったら、また、今年のように雪の多い冬であつたらどうなっていたらろうか、思っただけでゾーとする。とにかく何処から、何から手をつけてよいのやら茫然自失の状態。余震はまだ大きいのも起こる可能性(1か月以内に)ありと気象庁はいつている。昼間は家の中、夜は車の生活が4日間くらい続いた。その間新聞、テレビなどで川口町や小千谷市、山古志村などのひどい惨状を見聞きし心が痛む。そして、曲がりなりにも自家に住めるありがたさをしみじみ思う。また親戚、知人、友人などから励ましの電話、お見舞い、救援物資など送っていただき、本当に有り難く嬉しく、元気もたくさんいただいた。

10月27日震度5クラスの余震、二階の壁が、大きな音とともに階段を滑り落ちた。外に飛び出す。(午前11時頃)

午後2時30分頃、妙見町の土砂崩れ現場から2歳の優太ちゃんが、救出された。不明から5日、92時間ぶりに、奇跡に思えた。うちの孫と同年の幼児が暗い闇の中寒さ、淋しさなどと闘いながらよく頑張った。いつ岩が落ちてくるかわからないような危険な場所でのハイパーレスキュー隊に拍手を送った。テレビに釘づけの日であった。

10月31日、23日午前より守門村に母の介護にいつていた夫が、まわり道をしてようやく帰宅した。一人より二人私もようやく重い腰を上げ片付けが始まりました。修繕箇所は、なんとか大工、経師やさんの真似事などして進行中、いまは寒いのでお休み、期限は無いのですから。まだまだ壁の一部が落ちたり、ヒビが入ったりといろいろありますが目をつむっています。

思っても見なかった突然の地震、まさか長岡に、中越地方に、いままで雪くらいで大きな災いもなく過ごしてこれた。今回身をもって体験した中で、天災の恐ろしさをしり、うしなつたものもたくさんあつたが、隣近所、人と人とのつながり、暖かさやさしさ、いろんな支援等々…けつして忘れないでこれからの生き方の中に生かしていけたらと思っています。





## 中越地震に思う

先崎 美重

10月23日夕方5時50分頃、同窓会を終え家へ着き、着替えをしてしばらくしたらツンと押し上げられるような感じがしたと思ったら、ザワザワガタガタと激しく揺れる音、地震だ。大きな地震、立ってられない。店のあがりがまちの手すりにしっかりつかまって腰を下ろしてしまった。

電気、ガスは止まってしまい、戸棚の中の瀬戸物が落ちて割れる音、冷蔵庫が倒れて中の食品が散乱していた。どうすることも出来ない。地震が治まるのを待っていたが、なかなか治まりそうもない。

その時新潟地震の時のことが頭をよぎった。出入り口の戸が開かなかった事だった。早く戸を開けて外へ出よう。懐中電灯と座布団を手に、息子と二人戸を開けて外へ出た。

幸いな事に道路は何ともなく、隣の会社の駐車場へ避難した。そこには近所の人も来ていて、時々来る余震に怯えながら肩を寄せ合っていた。時々消防自動車のサイレンが鳴っていた。情報伝達が何もなく、どうなる事かと不安で一杯で、夜の寒さが一層強く感じられた。

近所の方が「車の中に入りましょうよ」と誘ってくれ、家からタオルケット、貴重品、現金を少し持って乗せてもらい、自動車の中のラジオを聞きながら月明かりの中で一夜を過ごしました。

2日目は、時々来る余震の合間を縫って、家へ土足のまま（長靴）入って見たら、部屋の電灯の笠は落ちそうになっていましたし、仏壇の仏様は外へ放り出されていました。神も仏もビックリした事でしょう。

町内からの情報は全くなく、これからどうしようかと思っていた矢先、平石会長さんから電話を頂き、「電気、ガスはどうですか」と声を掛けて頂き、早速心づくしのおにぎりと漬物を持って来て下さいました。心温まる心遣いに感謝しながらおいしく頂きました。同じ市内でも、ガス、水道、電気が使用できる所もあったようです。こんな時自分の事で一杯なのに、会員の皆さんを心配して下さった会長さん、頭が下がりました。

玄関、店、台所の破片を整理していたら、新潟から娘が駆けつけてくれた。電話は中々通じなかったそうです。道路も大変だったとの事、心配してくれたこと嬉しく思いました。食糧や水、カセットコンロ、ラジオ兼用の電灯を持ってきてくれた。

少し片付けを手伝ってくれたけれど、時々余震が来るので帰れなくなるといけないから、午後6時頃新潟へ帰った。

ご近所の方が、「車1台空いているからその中で今晚泊まりなさい」と親切に言って下さり、厚意を受けることにして夜は暖かく過ごした。

3日目は、家の中の危険物を取り除いた後も、揺れは時々くるので家の中にいるのも不安だらけでしたから、避難所（宮内小）に行ってみました。中は満杯で腰を下ろして休む場所をやっと見つけ、リュックを置き足を伸ばして休みました。よく見ると、皆さんは自動車で運んだのでしょうか。マットレス、肌布団、大きな



ものを持って敷いていました。私等は最小限のものしか持って行かなかったのに、毛布を借りてくるまっています。役所の方も手が回らないのでしょうか。通路の印がないので、人の場所を避けながら手洗いに行っていました。それでも病人が出ると思えないと思ったのか、地域のお医者様（窪田医師）が来られ、また市議会議員も来られました。大切なことと思います。

4日目は、朝食（パンかおにぎり・牛乳）を頂いて、とても寒さに耐えられませんが又家のことも心配になり、家へ帰り戸締りをして新潟へ行きました。新潟は嘘のような静かさで、別世界でした。

3泊して自宅へ帰ったら、留守電がたくさん入っていて、みんな心配してくれたことを思い、感謝しお交際を大切にしていかなければと痛感しております。

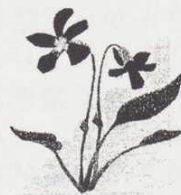
会員の石井さん、宮さんからもお電話いただき、会のつながりの暖かさを実感しております。

これから、壊れたところを徐々に修理して行かなくてはなりません。自然の災害には、人間の力では及ばないけれど、生きる勇気と知恵は人間は持っていると思う。何度も災害を受け、立ち直ったことを思い出しています。

#### 今回教えられた事

- 日頃挨拶くらいしか交わさなかった人も援け合うことが出来た。
- 日頃の非常時の備えをもう一度点検
- 独居老人の問題  
子供もなく、日頃近所交際をしない方でしたが、民生委員の方 近所の方が見てあげた事でした。
- 情報の伝達 地域のネットワークの必要性

自分で出来る手助けは、して行きたいと思っています。



## 中越大震災・・・時間が過ぎて

高野 睦

悪夢のようなあの夜、明かりの消えた道路に墓塵をしき、近隣の人達と肩寄せ合って余震に怯えていた事、何ごともなかったように月が寒々と照らしていたことなどを、4ヶ月あまりたった今も脳裏にやきついてはなれません。

何の前ぶれもない突然の地震は、人それぞれに大きなドラマを生み、人生の明暗をも分ける出来事でした。月にまで飛び宇宙を遊泳する科学の世の中に、予想もできない自然の脅威を見せ付けられました。

青白い月明かりの中に、我が家がゆらゆらと揺れているのを見るなんて、不思議な感覚でした。体のおくそこに震いはあるものの、案外冷静だったのは、被害が少なかったせいかも知れません。

自然は容赦なく追い討ちをかけ、19年振りの大雪に痛め付けられています。今は白い雪に覆われて傷跡も、あの驚きも、薄れたかのように思われます。雪が消えたらまた、色々な問題が出てくることでしょう。

何事も自分の身に降り懸かって見なければ、本当の痛みは分からないものと、つくづく感じました。

災害の翌日には山形から水が届き、夜には食料がと、全国の人達の暖かい助け合いの心、対応の速さに驚きました。

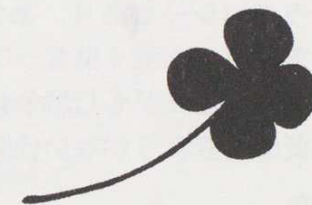
ライフラインの崩壊も、車中泊も、戦後を体験した私にはなんの不足もなく、皆様の善意に感謝の一言です。

この頃、稀薄になりつつある隣近所の付き合いも、この災害で絆を深められたことは嬉しいことでした。

災害時には、地域の連携が一番大切と思いましたが、行政も予想だにしない出来事に本当に大変だったと思います。情報の伝達が何もなくて不安だったこと、援助物資の配布を知らずに居た人、不平等が目立ちました。

今後は地区ごとの連絡網を、しっかりと作って貰いたいと思います。

何はともあれ、何ごとにも足手纏いにならぬよう、と考えざるをえない老いを、身にしみて感じさせられました。





## 新潟県中越地震

竹内 スミ

10月23日土曜日。その時、私は夕食の準備をしていました。夫は入浴中。

突然の大きな揺れにすぐ夫の母（85歳）のいる部屋に一夫の母は畳の上にかがみ込んでいました。「大丈夫だから…」と肩を抱いたその言葉の乾かぬうちに二度目の揺れ。

三度目の揺れの後は家にいたら危険と家族3人、外に出ました。

近所の人達も皆、外で不安げな表情。

小さい子のいる家庭では「小学校に避難させました」

何度も続く余震に夫の母だけでも小学校に避難させた方がいいか…と思ったが回ってきた消防団の人に小学校はもう満員とのこと。

また家族が離れるのはかえって不安なのでは…ということで車の中で寝ることにしました。

その日の夜は冷えて寒く、夫の母はトイレにばかり行きます。その度、家中のトイレに付き添い車から出たり入ったり。余りに頻繁で電気が消えなかったこともあり、家族3人家の中で寝ることにしました。

余震の度、起き上がりながらも家で寝たことは車の中より疲労が少なくて済みしました。

もし、この地震が明け方や夜寝ている時だったら夫と二人筆筒の下敷きとなったかもしれないと倒れた筆筒の前で思いました。

新潟地震から40年目。まさかまた、地震が来るとは夢にも思っていなかったのは随分甘い考えでした。

絶え間ない余震に震えながらもお天気に恵まれ片付けも進み、少しほっとしたのも束の間、27日お昼近くにまた大きな揺れ……鍵のかかった洋間の大きなガラス戸がはずれて外に飛び、左右に揺れる家の中の階段を下りて外に出た時、心底“怖い”と思いました。

そして、また筆筒が倒れ、夫と二人大きな溜め息、もう起こす気にもなりませんでした。

そして仕事へ。

生活援助員という仕事上、余震の中でいろいろな人間模様がありました。

プライバシーもあり、あれこれ語ることはできませんが心痛む連続でその余震はまだ心の中深く巣食っています。

そして、これがもし戦争だったら…と思うとぞっ！とします。

天災は防ぎようがないけれど戦争は人間の叡智でやめることができます。

いつ止むとも知れないこの余震が、戦争による銃撃だとしたら……イラクの人々を思い、いかなる理由があろうとも戦争は絶対にいけないと強く強く思いました。

平和—それは私たちにとってかけがえのないものだとして中越地震をとおして改めて知りました。





## 新潟県中越大地震を体験して

中村 ミヨシ

10月23日この日は1日早く私の77歳の誕生日をすることになっていました。夕食前に入浴を済ませようと服を脱ぎ、お風呂場に入ったとたんあの地震が来ました。電気が消えあわてて出ようとしたらお風呂場のドアの鍵がかかってしまい本当に心臓が止まりそうになりました。幸い電気がすぐつきましたので冷静になり鍵を開けて部屋にもどり、あわてて身支度だけ整えコタツにもぐり込みました。次の瞬間2回目の地震、家中がぐるぐる廻りお仏壇の中のもの全部落ちてくる。着替えをした部屋のたんすが飛んでくるはで私はコタツの中に頭をいれ布団をかぶってガタガタ震えて居りました。77歳になって生まれて始めて地震の怖さを味わって全く生きた心地がしませんでした。

揺れが少し落ちついてから、古屋だからとにかく避難所へ行くことにしましたが、その前に度胸をきめ、腹ごしらえだけしなければと御飯を食べ、残りは全部オニギリにしてカバン一つ持って川崎小学校体育館に避難しました。避難所には近所の方々も多く行ってらして心強く思いました。体育館は余り寒くて困って居りましたがその後教室の方に入れて頂き、また息子から毛布を何枚も持って来てもらって助かりました。日頃近所のお方とゆっくりお話しする事もなかったのですが、一つの教室でいろいろとお話したりお食事を一緒にしたり大勢でいるだけ本当に安心が出来た事感謝しております。

避難所生活が続く10月末、永田に住む娘からガスが復旧したのでお風呂に入りに来よう連絡をもらいまして一番風呂に入れてもらい、またお嫁さんが一生懸命御馳走を作ってくれました。お茶碗に盛った白い御飯と温かいお味噌汁の味は一生忘れることが出来ないと思います。

いつまでも続く余震のため身も心もおかしくなりそうで、避難所を出てからも息子が泊まりの日には一人で家に居られず娘の家に泊めてもらって居りました。孫が二人居り気がまぎれて良く寝ることが出来ました。しかし何時迄も恐れてばかりいても仕方なく日が経つにつれ山古志村、川口町の人々に比べたら本当に幸せだと思ふ様になり、瀬戸内寂聴さんの「和顔施」と言う言葉を思い出し、気持ちを強く持って頑張ろうと決心し11月20日家に帰りました。

私の主人は平成15年10月亡くなりました。生前長岡に必ず直下型地震が来るといって最後まで心配して居りました。寝たきりであの地震に会っていたらどんなに辛かったかと思うと、あの地震を知らぬまま亡くなった主人は幸せだったとつくづく思っています。主人の写真は地震の際にも落ちる事なくしっかりと家を見守ってくれています。

まだまだ余震も続く上に19年振りの大雪になっていますが、とにかく一日一日を無事でよかったと感謝して楽しく生きて行こうと思って居ります。



## 新潟県中越地震に思ったこと

長井 秀子

10月23日「幸齢セミナー」第2回を終え、5時半ごろ帰り郵便物を見ておりました。最初の一揺れでガシャンという音と共に停電し、思わず近くの壁にしがみついて落ち着くのを待って玄関まで行きました。暗い玄関は石油タンクが倒れ、石油のこぼれた所を靴下のまま飛び出しともかくドアを開けました。外へ出られると分かってほっとしたことを覚えています。

履物はなぜか長靴がいいと思ってそれを履き外に出ました。その時二回目の揺れがあり、近所の人達が外へ出てきたのでみんなで集まっていたのですが、6時11分、6時34分と続けざまに揺れが来た時は地面が波打ち、電柱は左右に大きく揺れてとても恐ろしく、少しでも広い所へとみんなで前のコンビニの駐車場へと逃げました。

その後、栖吉中学へ避難して下さいという車が廻ってきたので、一旦家へ入ってバッグと毛布などを持ってみんなで避難しました。道路はいたるところで陥没し、マンホールは50センチも隆起している所がありました。

若い人達に導かれて避難所へたどり着くと体育館は満杯で教室を空けてもらって入りました。一晩明けて朝家へ帰るとき、道々大きな亀裂や陥没、傾いた家々を見ながら我が家を心配して帰ったのですが、幸いにも家自体の損傷が少なく地盤も傷んでいないで助かりました。間もなく娘が駆けつけてくれ（昨夜は私を探しに中学や中央図書館へ行ったけど見つからなかったといっていました。）食器戸棚や小さな棚類は娘と何とか片付け、石油タンクは起こしましたが、二階の書庫のように使っていた部屋の本棚を起こすことは11月になってからボランティアを頼みました。

今回認識を新たにしたのはボランティアの存在です。避難所でも避難している若い人達が部屋割りをしたり、食事を配ったり自主的に働いていました。トイレの水汲みは学生たちがやってくれました。使った後のトイレトペーパーを入れるビニール袋を用意したり、ぬれた床を拭くモップなども用意されてみんな自主的にきれいに使っていました。

頼んだボランティアの人達は日帰りで長野から来た人達でしたが、いい意味でボランティア慣れしていて頼んだことはきちんとしてくれる、無駄なことは言わない、でも「この引き出しの中は大切な物のようだからいじらない」といったように時間いっぱい働いてくれました。

もう一つ感じたことは防災に対する地域の取り組み方です。

今年私は町内の班長で、年度始めに町内の防災委員会は役員と班長を以って組

織するといわれて、私のような高齢者が何もできないのではといったのですが、みんながその時になれば若い人が助けてくれる、などと取り合ってもらえませんでした。

実際この地震で組織としては何も動きませんでしたし、連絡が電話ということになっていたのに電話は4~5日使えませんでした。

地震後のアンケートに防災委員としてどう動くかマニュアルが必要と書きました。

しかし、班長としての仕事は次々と来て、それらの中で一人暮らしの高齢者の安否確認ができたり、食料を運んだり、買い物を手伝ったりしました。

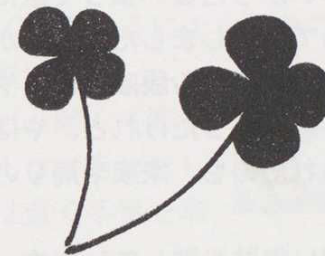
防災委員の仕事の第一は住民の安否確認だと思います。うかつにも私は自分が逃げることや離れて住む子どもや孫のこと、家の損傷が気になっていて班の人達の安否確認に思いが至りませんでした。むしろ手足まといにならないように、人に迷惑にならないようにと行動していました。

班の人達の安否確認は一軒一軒歩いて確認をする以外に方法はないと思います。4~5軒を1グループとしてその中の長を決め、確認したら班長へ、班長は町内会長へと一番手間がかかる方法ですが一番確実な方法だと思います。

私の班は一度も集まったことがありません。一軒一軒何人家族かも分かっていません。これを機会に班で集まって、小さな単位で安否確認することを確認しあう必要があると感じています。

ぼうっとして何も出来ない時期もありましたが、今は余震も減ってまわりの大勢も落ち着いてきましたので日常生活をしながら少しずつ片付けています。

町内で取り壊す家が増え、同時に廃業を決めたりしているのを見ると胸が詰ります。大した損害も受けず、働かなくても生活できる身の幸せをしみじみ感謝しています。





その時 私は台所で夕食の準備をしていました。

ちょうど友達が用で来ており、並んで流しに立っていました。思わず抱き合うと言うか 捕まりあって揺れを押さえると言うか でもすぐに地震だと気づき 「ガスを消して・出口を確保して・懐中電灯の用意」などと冷静に行動出来たのは、友達と二人だったからだと思います。

2度の揺れの後 懐中電灯のそばにあった ホッカロンを全部袋に入れて前の会社の駐車場に行きました。2分位で6軒の隣組とわたしの友人が集まりました。

Aさんのところは若夫婦と2歳のさくらちゃん。おばあちゃんは会社からまだ戻らないとのこと。さくらちゃんのママは 年が明けたら赤ちゃん生まれるのもうおなかが大きいです。さくらちゃんはちょっとおびえてパパに抱きついていています。

Bさんのところはおばあちゃんと4年生の男の子。中学生のお兄ちゃんをパパが塾まで送っていったとのこと。ママは日赤病院の看護婦さんで日勤けどまだ帰らない。5人家族だけど今はとっても不安だつて。

Cさんの所はお父さんは単身赴任で留守家族は5人。若者3人は皆外出中。

でも皆携帯があるので良かったとのこと。圧迫骨折が治って退院されたばかりのおばあちゃんを抱えてお母さんが集まってこられました。

Dさん85歳男性一人暮らし。Eさん78歳男性一人暮らし。

そして 私67歳女性一人暮らし。これが我が隣組6世帯。

私の友人が車を移動してきました。トランクにあったビニールシートと紙をしきました。カーナビでテレビを見ました。地震情報が続々と入りだんだんと事の重大さが解ってきました。

お年寄りと子どもが居るので、少し動ける人は急いで家に入り座布団・毛布おかし・バナナ・水・湯茶・などを持って来ました。

私は動く人の部類でなく、お年寄りを支える部類となっていました。

30分ほど過ぎた頃、Dさんの息子さん・Bさんのパパとお兄ちゃんなどぼつぼつ 人数も増え同じ事ばかり言っているテレビ情報に加えて、みんな道に固まって居るとか、真っ暗だとか、職場も塾もすぐ帰るようになったこととか水道・ガス・電気みんなストップとか解ってきました。

50分程外に居たでしょうか？月も星も綺麗だけど、暗くて寒くてはどうすることも出来ず「家に入りたい」とみんなできめました。家に入っても水も電気もガスもないと言う事は全く手足を取







られたごとく、することもなく「こんな時は高さは限りなく低く、床面積は大きくだね」なんていいながら布団を敷いてホッカロンをいれて、どうせ寝るならパジャマ着てリラックスしようよ。と友達にもパジャマ貸して布団の中でお喋りしていました。30分ほど過ぎてから、地域の広報車が回ってきました。その放送ですぐ外へ出てみたけれどなんにも聞き取れず走り去ってしまいました。

またも集まった近所の人たちの話を総合すると、「小学校に避難しましょう」と言うことらしい。相談の結果は「家に入りたい。大きな余震が来たら違ってでもまたこの広場に集まりましょう。集まれない人には何とかたすけに行くから」と今思うと随分無責任な確認して家に帰りました。

家に入っても何もする気にならず、布団に入りました。夕食は出来ていたのに何も食べる気になりません。が今思うに外に集まったときバナナにおせんべいにパンにと無意識に口に入れてたように思います。

友達は柏崎の自宅に何回も電話するのですが、かかりません。

ふとんの中で暖まると電話が来ます。娘から、兄姉から、友人から……

そして大阪や京都・東京・群馬から地震情報が入ってきます。

そんなことが夜中の12時過ぎ迄続きました。一人暮らしてつけた非常電話まで「電気切れです。」と怒鳴り、消防署からも「沼さん どうしましたか」と問い合わせがありました。隣のEさんまで「ガスの元栓がパカパカしてるけど大丈夫か」って呼び鈴はなるし ちょっとの付き合いの 遠い友達まで電話くれるんだから、電話線もパンク寸前。なかなか眠らせてくれませんでした。

友達が自宅に電話通じなかったのは、FAXなどの機能が付いていたからです。後で分かったのですが、停電の時は電源を切って電話線だけにする事が大事のようです。

翌朝 朝食もとらず友人は柏崎に戻りました。でも10分もたたないうちに通行止めで柏崎までいけないと言って戻ってきました。道も屋根も崩れていて大変だとの事。

この日10月24日 私は親戚の結婚式参加の予定でした。娘も私も和服で列席を予定していました。娘の夫の弟さんの結婚式です。23日の午後からは古正寺の娘の家に 東京から5人も結婚式参加の来客があったのです。

そして6時過ぎにご馳走を2品ほど届ける話になっていました。地震がもう10分遅かったら私も友人も運転中のはずでした。予知できない自然災害の怖さや運を考えました。

結婚式は海に見える丘のホテルでと言うお二人の希望で、米山が会場でした。若者たちは行動力があるので、いろいろ情報を集め遅れるとしても、予定通り



結婚式をやることになりました。

北長岡の方の友達がコンビニからペットボトルとパンを買ってきてくれて着付けをしてくれました。11人が2台の車に乗り、その後ろに柏崎の友人がついて薬師峠しか越せないという道を柏崎を目指して走りました。渋滞で2時間遅れで到着。津南からは30分遅れ、新潟市からは3時間遅れ、そして東京・千葉からは不参加というアクシデントの中で3時間遅れの結婚式が始まりました。

地震騒ぎのなかの忘れられない結婚式ではありますが、とても充実した 素敵な式と披露宴でした。新郎新婦は2年近くもドイツで仕事をしてきたカップルで スウェートルームも私達に開放して下さいました。孫達も大喜びで大きな風呂に入り、水も沢山貰って11時頃帰宅しました。



その翌日の月曜日、この日から私の地震騒ぎは始まりました。

娘夫婦は宮内中・江南中 勤務で被害が大きく いつもより早く出勤遅くお帰りで、小学生3人の余震から命を守る任務が私にかかってきました。その日から学校が始まるまでの10日間ほどどこへ行くにも後部座席に3人の小学生を乗せての活動でした。

避難所には行きませんでしたしそのボランティアも出来ませんでした。地域の福祉に少し関わっていますので、こぶつきで地域や友人・親戚をまわりました。そしてボラ銀と食事サービス活動は予定通りやれました。

我が家の被害は大きいけど軽い額が落ち、二段重ねの本棚の上部が落ちました。浴槽のタイルが2枚取れて、亀裂が少し入りました。食器棚・サイドボードの中でグラスや食器が割れていました。

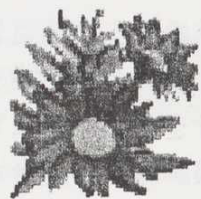
墓石が倒れ、屋根のぐしが4日の余震で崩れました。認定は「一部損壊」です。4月現在屋根にはまだブルーシートがかかっていますが、雨漏りせず風もよけ生活できることを運が良かったと思っています。予期せぬ地震災害でいろんな影響を受けたくさんの事を学び 課題も多く受け止めました。

嬉しかったことは 人との繋がりが深まったことです。数えれば限がないほど沢山のひととです。例えば……同級会に一回も参加されていないTさん。山古志に嫁がれたと聞きました。かなり古い名簿を探しました。確かに山古志村南平とありますが、電話番号もありません。避難所や役所に聞いても判りません。

近くの青葉台に仮設住宅が出来移転されてからはなおのこと気になり、診療所にまで訊ねました。結果は数年前に与板に移住されていました。私が探していることをその人に知らせてくださった方がおりある朝Tさんから電話がありま



した。45年ぶり位です。「私は百姓だし、障害のある子がいてクラス会どころではなかったけど、今はその子も亡くなりました。とっても懐かしく思います。春になったらお会いしましょう」と。すっごく嬉しかったです。



小千谷に友人 Yさんがいます。ある時 始終顔をあわせているSさんが「Yはね、家は壊れて住めないけれど元気だて。今雇用促進住宅に入ったて。」「えっ! どうしてYさんの事を?」「私の姪っ子だて!」「??」「沼さん Yの結婚式に受付していたねかね」「??? どうして今まで?」「おら 知っていると思ってたて」「???» 嬉しい縁でした。

悲しい事も沢山ありました。避難所での争い。ゴルフバックまで出すと言う便乗ゴミだし。今何が一番大切か、何が緊急かが考えられない事なかれ主義のお役所的工作。援助物資の奪い合い。

そして 何よりも自己責任でもなく 地震災害で 不運で 衣・食・住を失った人達への国からの支援が 直ちになされない事がとても悲しいです。

北部体育館に支援物資が沢山あって、取りにきて下さいとの知らせが出たとの事。でも足が痛くて歩き辛いお年寄り、車を持たない老夫婦、一番今必要なのに 取りにいけないだろうなって思いました。障害者や介護の必要なお年寄りには共同の避難所は暮らし辛いだろうなと悲しくなりました。

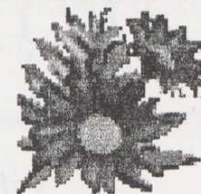
水害の被災者救援の時も思ったのですが、国も自治体も金がないんだから、どこかで我慢しようよ。例えば「市政便り」が一年間白黒印刷・紙質をおとして救援費用になるのならみんなで我慢しようよ。そんなこと考えれば幾つかありと思うんだけど……

学ぶことも山ほどありました。パニックにならないコツ・自分らしく暮らしたいコツ・ボランティアのあり方・細かいことを黙々とやる人も必要だし全体を見回して公平にみんなを動かせる人も必要であること・その他もろもろ 得てして平素の暮らし方が非常時に出るに過ぎないのだから、平常時にみんな仲良く 公平に 意見はきちんと述べて 陰で非難ばかりしていない……の過ごし方を心がけておきたいものをつくづく思いました。

私は遺伝子のお陰のような気がするのですが、地震があんまり怖くないというか、怖がっても来るものはくるんだから 万全を期して後はこわがっても仕方ないと思えるタイプようです。普段とてもしっかりと泰然としている友が意外や「きゃーっ」と悲鳴を上げたり、いつ死んでもいいなんて言っている友が少しの揺れで怯えたりしています。「世間広しと言えども地震の夜パジャマに着替えて眠った人って沼さん位じゃないの」と笑われています。「ちょっとのゆれ

でも、(きゃ〜っ〜) っとしがみつくと女性って可愛いんでしょうね」と私は笑い返しています。これは冗談として地震を怖がる人にもたくさんの段階があるという事。そして怖いという感覚は理性や理論でもどうしようもない事であるということ学びました。人それぞれとか簡単に言ってた事の意味がより深く理解できたようです。地域や隣組・友人関係の結びつきの大切さも思い知らされました。

少雪のはずの冬がとんでもなく大雪で長く ようやく春。芽吹きも元気を与えてくれるでしょう。春が来たらってみんな待っているようですが 地震災害の後遺症はこれからも深刻に出てくるような気がします。

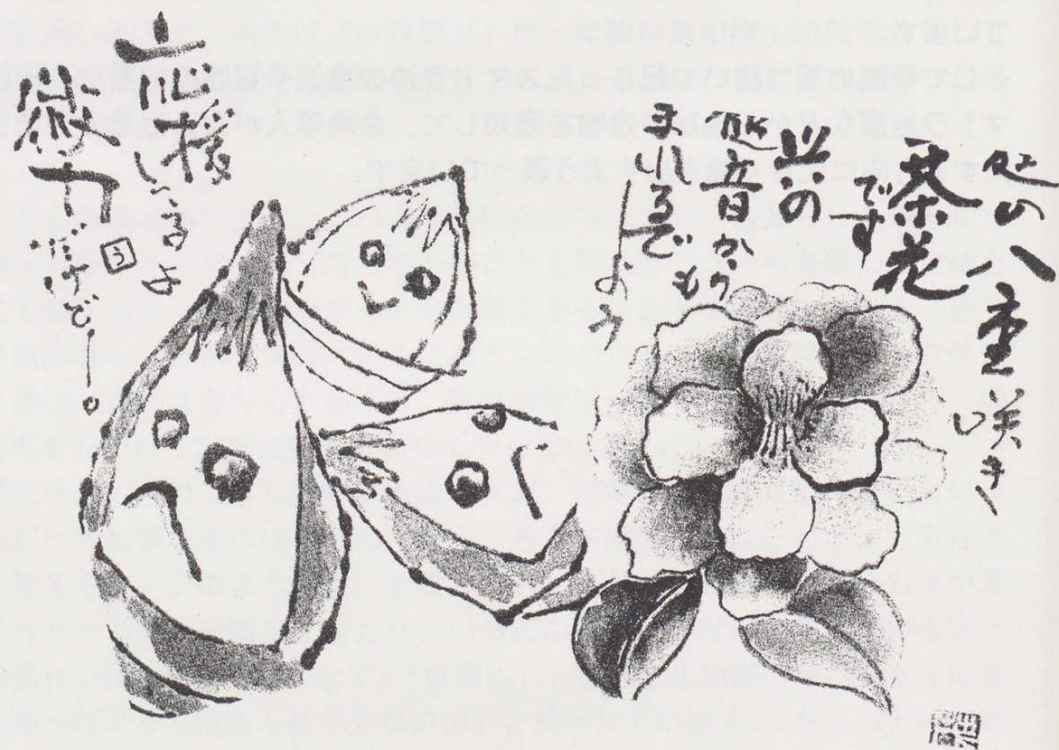
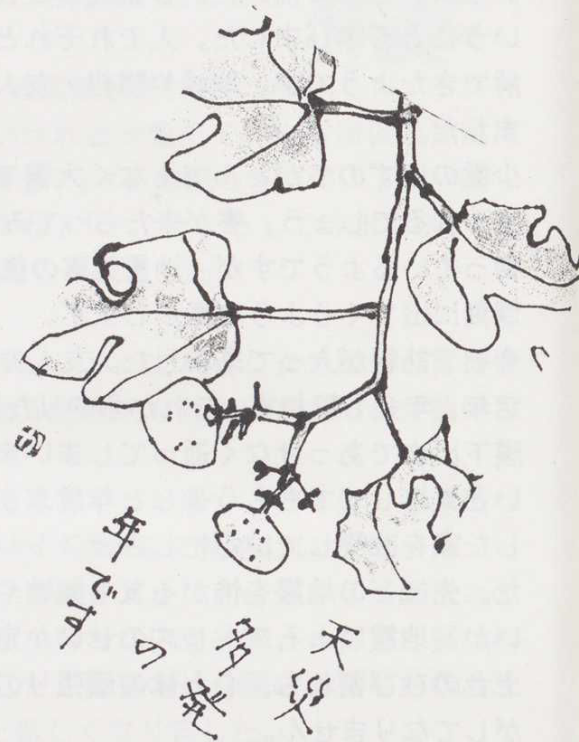


今朝 訃報が入って来ました。友人のSさんはこの3月で定年。年金も貰わず、これからやりたいこと出来るのに、くも膜下出血であっけなく逝ってしまいました。頑張ってた働きすぎたのか、体調悪いと気にしててももう少しと年度末まで頑張ったせいか、はたまた地震で全壊した家を改築している忙しさとストレスのせいなのか、つらいつらい一日でした。先ほどの地震を怖がる友も難聴や脳動脈瘤に悩まされています。加齢のせいか、地震によるストレスのせいかな定かではありませんが 雪消えと共に家の土台のひび割れも、心と体の頑張りの限界も 目につきはじめてくるような気がしてなりません。

せめて 社会面をにぎわす記事があったかく素敵な話で埋められますよう願っています。

そして中越地震に続いて起こったスマトラ沖の津波や福岡の地震や、再度のスマトラ地震などから地球の悲鳴を察知して、全地球人が命と自然・大地を大切にしよう方向に大きく動き出すよう願っています。





## 震災と私

平石 京

液状化現象という言葉で世界的に有名になった新潟地震から今年で40年。当時の状況を記憶している人々の話が聞きたいと、新潟日報の記者が“長岡老いを考える会”を訪ねてきたのは5月半ばであった。

その時、当時30歳だった私とその瞬間に覚えた心情をまざまざと思い出したのだった。40年前、自宅から離れた勤務地ですぐに帰宅できなくなった状況の中で私は、当時当歳になったばかりの我が子の事だけに心が行って、周囲の状況へどう対応したか、ほとんど記憶にないのである。偶然にこの新潟地震を鮮明に思い起こすチャンスを与えられた後で、私は再び激震に遭遇した。

10月23日“長岡老いを考える会”が主催した市民対象の「幸齢セミナー・高齢者の愛と性」を中央図書館で開催した後、ホッとして家路についた。その途中に立ち寄ったスーパーマーケットで仰天の瞬間は来た。驚愕は地面の揺れよりも周囲の物音の凄まじさに増幅されるようだ。

棚の物が飛び、落ち、割れる。ショッピングカーが勝手に走り出す異様な状況に加えて、人々の叫び声や走り回る音が、否応なく緊迫感を増す。

柱の側に寄ってしゃがみこんだ時、私は思いのほか周囲を見回すゆとりがあったようだ。私から2、3メートル離れた通路に高齢の女性が一人、ショッピングカーにすがったまま呆然と立ち尽くしている。冷静に周囲を見回しているという様子ではなく、腰が抜けたような感じである。足元には瓶が壊れて液体が流れ出している。私は思わず飛び出して「こっちへいらっしゃい！」と腕をつかんで柱の側へ引きずり込んだ。私自身の心臓もバクバクしていたが、人を一人抱え込んだ事で妙な責任感のようなものを覚えた。

店の中にいるべきか外に出る方が安全か、たくさんの人たちが右往左往している。出口まで最も遠い位置にいたのだが、とにかく「出よう」と決心して、定まらない足元のその人を抱えるように出口に向かった。いささか乱暴に急がせてようやく外に出ることができた。見上げた空には美しい月があった。

途中で幾たびかの余震にたじろぎながら、ようやくたどり着いた我が家では、夫が必死で書斎の本棚を抑えていた。リビングの観音開きの食器棚は扉を開け放して、客用のカップが見事に散乱している。本棚よりこっちの方を押さえて欲しかったと愚痴っても後の祭りか。洗面台、洗濯機は上から落ちた物で蓋や瀬戸物の部分が割れていた。ともあれ人的被害がないことを喜ぶべきだろう。

数日後に良く見回すと、壁には無数のひびがあり、大きな家具の理不尽な移動や、小物の転倒は枚挙にいとまがない状況であった。近隣の人々はその夜11時過ぎまで外に出ていたようだったが、私たち夫婦は「この家は大丈夫」という自信があったわけではなかったが、「なるようにしかなるまい」という諦観から全く外に出なかった。後で聞いた所では、近くの学校へ自主避難したり、その校舎が危険との指示が出て、再び移動したりと大変だったらしい。



有り難いことに、この地区では水も電気もガスも切れずに生きている。在り合わせの夕食を口に押し込みながら、市内に住む子供家族の安否を電話で確認する。「お互い、一人でないって心丈夫だね・・・」と話したあと、ふと独り暮らしの友人を思い出した。どんなにか怖いだらう。心細いだらう。そう思った途端、電話をしていた。「何も持たなくて良いから、とり合えず家においで」と誘った。結果は、親戚のお宅にお世話になるとの事であった。

翌 24 日から、「長岡老いを考える会」会員の安否が気になり、片っ端から確かめにかかった。電話で、また通じない所は近くまで行って家の状況を眺めた。中の様子は知る由もないが、外見はどうやら無事のようにだ。こうして曲がりなりにも全員の無事を確認することができた。現在、長岡市の 65 歳以上の高齢者の 7% 近くが女性の独り暮らしである。「老いを考える会」の仲間にも懸命に生きている人たちがいる。どうしているだろうと思わずにはいられない。ライフラインが切れて水がない、ご飯が炊けない、スーパーには即食がない、との情報があって、急ぎょ炊けるだけのご飯を炊き、おむすびを握って宮内方面の仲間へ届けた。

25 日夜には山古志村の全村避難の報を受けて、降り出した雨の中で避難所の夜は寒かろうと、大手高校体育館に布団の要否を問い合わせた。「避難所を開設したばかりで助かる」との返事。洋間暮らしになって使わなくなった炬燵布団を持って駆けつけた。この避難所でこれから先どれほどの期間を生活されるのだろうかと胸を突かれる思いがした。これは単に衣食住の生活だけの事ではない。生計の基盤、農、水産、観光が根本から覆ったという事なのだ。その現実が被害状況から明らかになるにつれ、何とも言いようのない同情と、私たちに何かできることはないだろうかという思いが大きくなっていった。実はこの地震の一週間ほど前の 10 月 15 日に、私は「長岡地域広域探訪ツアー」に参加して、山古志、川口地域の美しい風景に触れてきたばかりであった。あの棚田も、あの闘牛も、再び目に出来るのはいつの事であろうか。

阪神・淡路大震災と様々に比較されるこの度の地震。更には 40 年前の新潟地震と比べても被災者の何と多くが高齢者である事か。十分に動ける人の割合が少ない中で、黙々と後片付けに、再建に働き続ける越後の高齢者たちの映像を見るにつけ、その粘り強さに敬服してしまう。通り一遍の法規制の下で復興支援する国政の姿勢に、苛立たしさと不甲斐なさを感じるのは私だけではあるまい。「家屋は自己資産だから、再建に援助は出来ない」という。営々と築いてきた生活と財産を、何の落ち度もなくまさに理不尽に失って更に、今まで自己の財産については税金を払い続けて来たのではなかったか。市町村合併が為されると、長岡市の高齢化率は 21% を超える。今、年老いて再建がかなわぬ事が目に見える人々を思うと、法の冷たい壁に脱力感さえ感じてしまう。地域の特性である豪雪、高齢、過疎、といった非生産的地域への温かな視線を持った支援策を願わずにはいられない。この土地も日本の国土なのだから。

震災後 4 ヶ月を経て、この間に数千度に及ぶ余震を経験する中で、私たちの心

身に様々な過敏反応や、二次的な災害が襲い掛かっている。

我が夫は、震災後 2 週間した頃から急激な血圧上昇に驚き、減塩、減塩と言いつつ立てていたが、11 月 27 日夜、心筋梗塞で倒れ緊急入院、心臓の血管拡張手術の結果ようやく生命をとり止めた。恐らく平穏な日常が続いていたら起こらなかったであろうこの事態は、災害後の後始末も半ばだった我が家では、本当に大きなエネルギーの消耗であった。

12 月末、ようやく退院、現在は平常の生活に戻っているが、地震と心筋梗塞の記憶は生涯消えないだろう。

更に駄目押しをするかのごとき 19 年来の豪雪は、一応平常の生活に戻った私共の家屋でも「震災で傷んだかも知れない」という不安から「雪下ろしをしなくて良いだろうか」と日毎夜毎に気持ちを急きたてる。まして自宅を出て避難生活をしている人々の、自宅に対する思いは如何ばかりであろうか。

この間に世界のニュースは、スマトラ島沖津波災害を報じている。今、地球そのものが悲鳴をあげているように思える。私たちの子や孫が平穏な日々を過ごせるのだろうか。日々の生活の中で個人として何をすることが出来るのだろうか。もう一度考え直すべきなのだろう。

私自身の思いで言えば、新潟地震から 40 年、身の回りしか見えなかった視野に、少し長い半径の周囲が見えるようになったと思う。己の事も、親族の事も、近隣の事も、そして己の属する地方行政の立場も見える目を養ってくれた年月に感謝をしよう。年をとることも、まんざら悪くはないようだ。

(この文章は、震災後一ヶ月ほどの時、他からの依頼により稿したものにいくらかの修正を加えたものです)





## 恐怖の中越地震 その時 私は

宮 征子

十月二十三日「老いの会」主催の講演会があり、講演終了後、役員の方数人と喫茶店に入った。皆さんは軽食だったが、なぜか？私はうどんを注文した。それは後で私にとってとても幸いだった。

食べた後、皆さんと別れ、図書館に立ち寄り、それから会員の方に書類2～3を配り、家に着いたのが、五時五十分頃だった。

何時もの様に帰宅してすぐ仏壇にお参りし、着替えしようと隣の部屋に行こうとした、[その時] あの突き上げるような悪夢の強震に襲われた。

ただ、ただ無我夢中で、のこの様の所に這って行き、仏壇のお明かしを消し、戸にしがみつき治まるのを待った。その時の恐怖は言葉では言い尽くせない。

少し落ち着かせ、急いで奥の部屋に駆け込み、ベットの中から毛布を引っ張り出し、毛布を頭から被り枕元に置いてある懐中電気を持ち、隣の部屋に置いてあった「あめの袋」をポケットの中に捻じ込み外に走り出た。

家のすぐ隣が広い道路になっているので、次々と近所の人が集まって来て、18～19人になった。すぐ前の人のござを出してきて、子供達を囲み肩を寄せ合って共に恐怖をしのいだ。

一向に収まらない余震に慄き、異様な月明かりに自然の猛威、地球の破壊をも感じさせられた不安の夜だった。

あめを分け合って口に入れたり、家に走り込んでパンを持ってくる人もいた。

十時頃近くに嫁いだ娘が心配して、迎えに来てくれた。二人で懐中電灯の明かりで家に入ったら、花瓶等の壊れ物が散乱していた。土足のまま奥に進み、押入れの中から非難用リック（以前から用意して置いたので大助かり）を担ぎ火の元を再確認して娘の所に四泊した。

昼間は家に帰り、電気の止まった冷蔵庫の物を食べたり、石油ストーブ（ファンヒーターでない石油ストーブも1家に1台必要）でお湯を沸かして生活していた。ライフラインは早く復旧出来て大助かりだった。余震の度に外に飛び出し、近所の人と恐怖を分かち合いながら不安な日々を過ごしていた。

その後二日間近所の人と車の中で寝た。もう一週間にもなるので家で寝る事にした。玄関口の部屋で着の身着のまま避難リックを枕、横になる日々が一ヶ月以上も続き、余震に脅えながらの食事作りや入浴は思う様には出来なかった。

お蔭様で被害が割りと少なかったのですが、何とか家で住む事が出来有難いと思っている。一向に収まらない余震に、精神的にもほとんど疲れはて、不眠になってしまった。少しずつ頑張っていかなければと、自分を奮い立たせている。

被害の大きかった山古志、小千谷、川口等の皆さんには心が痛みます。

心よりお見舞い申し上げます。

今後に向けて

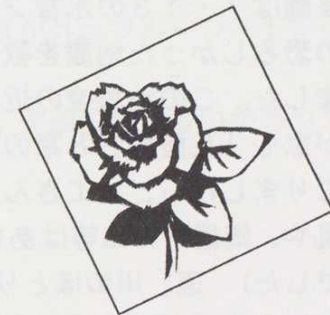
町内に防災対策班を早急に作ってほしい。

防災役員、班長を通して避難場所、安否確認等の指示、いろいろの情報が欲しい。

生活援助物資の配給も一人でその場所に行けない人がいる。

町内で調べて、もう少し配慮して配る事はできなかったのか？

問題点が多く聞かれた。





## 中越地震に寄せて

宮沢 静江

私は「地震の発生した時」は、外出し帰宅して、すぐ台所で夕食の支度中でした。母(93才)が早々テーブルに待っておりその母が、テーブルと一緒に転び、その姿を見て「母さんが病気になったのか……」と心配しました。

その何秒後に「すごい長い地震」が来て、返しがなかなか来なくて、来たと思ったら、長い時間、メリメリの音と同時に、家がすごく揺れに揺れて、このまゝいつ迄も台所には「家の下になり死んでしまう。今から死んではいけない、これから、私の楽しい人生なので」と思い、すごく揺れている中、母と二人で肩をよせ合い、やっとの思いで、玄関まで、はってにげました。その時の廊下の長かった事。(いつもは、長く感じない廊下なのに……。)

93才の母も「こんな目に会うのは始めてだ」と顔を青くしておりました。やっと思いで、外に出たものゝ、「どこの位置にいれば一番安全かな」と考えながら、母と二人で手をつなぎ逃げていました。

本当に昔から「地震、火事、かみなり、親父」地震と云うものは、「こんなにも恐ろしいものだ」と身にしみじみと強く感じました。こんなすごい恐ろしい地震は、二百年に一度とか……、ある先生から聴きました。

北中の避難所に、母と始めて一泊した夜は、「食わず、飲まず」で一夜明けました。その時の様子は、まるで「テレビドラマ」を見ている様な気がしました。(本当に、長岡迄……。こんな目に会うなんて。誰もが、想わなかった事でしょう。悪い夢を見ている様な、ショーであればと祈りました。

長岡は7・13の水害プラス地震……。ことわざですが「転ばぬ先の杖」で、この恐ろしかった地震を教訓にして、これからの人生に役立たせたいと強く思いました。この地震後の近所他は、「瓦屋根」がやられた家が沢山ありました。我が家も「瓦屋根」と家の中の「壁」が、二階と下の部屋がダメになり4月頃になりましたら、大工さんから良く調べてもらい、直す予定です。我が家は、家具や、陶器、お皿等はあまり壊れませんでした。(お皿が4~5枚われたぐらいでした) 道、川のほとりなども、大きな穴、デコボコなどひどくなり、毎日毎日、工事車が沢山来て大変でした。青森、大阪、北海道、名古屋ナンバーの車も沢山見ました。(遠い色々な県の人達の支援のお陰で、助けてもらった恩は又いつか私達もお返しさせて頂きたいと、思っております)

私は、地震後に、知人、友人達からの話を聴き、自分なりにまとめて考えてみました。

一点目は、家具類等はあまり高くない、自分の肩位の高さの引き戸が、一番

安全だと考えました。

二点目は、壊れやすい危険な飾り物はダメ。

三点目は、飾り物、食器棚、他は、しっかりと、固定が大切。

四点目は、日頃から近所の人達の交流が、こんな災害の時に大きな力になるとつくづく感じました。

避難所でも、見知らぬ人々との助け合いや、支え合えが、素晴らしく私は感動致しました

## 中越地震に思う

諸橋 セツ

何時もより早めの夕食時にドンと同時に二・三回大きくゆれる。なんだろう、地震に気付く、頭の中はパニック、足元は家財がくずれて外へ出るのがやっとなった。

幸い電気が消えなくてよかった。寒かった。隣組の方々と広場に集まる。また大きくゆれる。深夜、隣組の方の車で一泊させてもらった。

朝明けて家の中を見るといろいろ倒れていた。屋根瓦が外れブルーシートを張る。物事にピリピリ。

この度の地震で隣組の方々と親睦が深まった。皆様、家族の助け合いがあって今日がある。雪も多いががまんして春を待つ。



## 中越地震に寄せて

山崎 貞

ドスンと云う衝撃と激しい揺れ、“地震”と叫んだ。  
今まで体験した事のない長い揺れ、ガシャン パリパリと、物が倒れる音、冷蔵庫の引き出しが一人で開け、ぶつかり合うすさまじい音。

停電……。

枕元の懐中電灯をつけ、ラジオを入れた。

何しろ十日前に事故で足を骨折し、動けない状態の中の地震でした。次男がかけつけてくれたのは三十分後、とりあえず、ヤカン、バケツ、鍋に出来るだけ水を入れるよう頼んで、整理は明るくなるまで待つ事にして、横になった。

事故にあってから、次男に食事の仕度を頼んでいましたので、助かりました。

翌日二階は戸棚、本棚が、タンスも倒れ、足のふみ場もなく、戸もしまらず、ギンギシと音がして、住めない状態で、夫は半月以上もかかって片づけて、くたくた。私は何も出来ない状態でしたので、仕方ありません。

電気は二日位、ガス、水道は使えましたので、幸にも不便は感じませんでした。

避難所に行かなかったのは、我が家だけと、後で聞きました。

電気が通じぞくぞくと入る報道のすごさ、いたまじさに、またまた驚きの一方でした。

十日町、小千谷、友人達の情報が入らず、私が動けないので、新潟の友人達が訪ねてくれました。みんなそれぞれにボランティア活動に、がんばっていてくれているとの事、安心しました。長岡で栖吉に住む友人には連絡がとれず、避難所暮らしをしていると聞きましたが、動けないので人づてに連絡してもらいましたが、山側の住宅の被害のすごさに、あらためて地震のこわさを知りました。

四十年前の新潟地震は次男の出産で病院、中越地震は骨折で動けず、何も出来ない自分にもどかしさと腹が立って仕方ありませんでした。

四ヶ月もたって、また余震があり、今さらに恐ろしさを感じます。

災害は予知されていて、警鐘は鳴らされていたとの報道がありましたが、市民にどれだけ伝わっていたのか疑問です。

この地震がどの程度、一般に教訓になったのか、今後の話題かもしれません。

## 恐ろしかった中越地震

山下 弘子

○そのときわたしは

10月23日第2回「幸齢セミナー」を終え、ほっとして家に着きました。そろそろ夕食を食べようと、食卓につきました。とたん、地面を突き上げるような衝撃と共に激しい揺れが襲いました。「アッ地震だ」夫の「大きいぞ」と言う声、ガラガラと物の落ちる音、電気がぱっと消えました。とにかく外にでなければと思い、玄関にやっとの思いで出ました。

アパートの前の広場に大勢の人が集まっていました。続く余震が起きるたびに、「キャー」と言う叫び声があがりました。暗闇のなか、電線、木々、家がゆらゆらと揺れ、自然の脅威に怯えました。ただ月がものすごく輝いていたのが印象的でした。

しばらくすると、息子が様子を見にやってきました。わたしたちと、近所に住む従兄弟の老夫婦の無事を確認すると、「中沢もたいへんなんだ」と言って帰って行きました。

午後8時頃になって、アパートの人たちは市民体育館に避難することになり、みんな引き上げて行きました。わたしの町内からはなんの連絡もありませんでした。夫は余震の合間を縫って落下したものを片付け、寝室までの通路を確保することができました。

近所の人も市民体育館に避難しようと出かけ始めました。あたりは誰もいなくなり、寒さが身しみてきました。

わたしたちも避難を考えましたが、人の大勢集まる場所での歩行、トイレの問題、立ったり座ったりの問題、どれをとっても障害者であるわたしには難しいことでした。

『なにがあってもうちでいいや…』と思い、夫と2人余震の続くなか、午前2時頃、着の身着のままベッドに入りました。寝付かれないままに24日の朝を迎えました。

水道、ガス、電気のスイッチを入れてみました。水道はチョロチョロと、電気、ガスはまったく出ませんでした。さあ困った。ガスはカセットコンロで間に合わせましたが、電気は手の施しようがありませんでした。そうこうしているうちに、息子家族と飼い犬のマメちゃんが、車でやって来ました。3階は揺れがひどく、ライフラインもすべて止まり、駐車場は地面が波打ち、とても生活できないとあって、暫く、土合に避難することにしました。

24日の午前8時頃、三条・新潟から息子の同業者が、午前10時頃、新潟から嫁の両親が、5時間ばかりで来てくれました。水、おにぎり、その他食料



品、乾電池、キャンプ用の大きいランプなどをたくさん持って、駆けつけてくれました。そしてみんなが無事であったことを喜んでくれました。

また、平石会長さんの「どうだった、大丈夫」という訪問での言葉がけ、遠い親戚や知人、友人からの電話も嬉しいと思い、感謝の気持ちでいっぱいでした。

#### ○その後わたしは

息子家族と一緒に生活も、土合、中沢地区のライフラインの復旧が終わった11月8日で終わりました。ただマメちゃんだけは、避難犬として11月末までわたしたちと生活を共にしました。マメちゃんは大きな余震がくると、心配そうな声をあげて人のそばに寄ってきて、動物でも人間と同じく恐怖を敏感に感じるようになりました。

千葉にいる姪の家族からは迎えに行くから、千葉へ避難するよう誘いがありましたが、新幹線は不通、道路事情も悪いので、長岡に留まることにしました。

日に日に情報が伝えられ、山古志や川口、小千谷の被害に比べれば我が家の被害は小さかったことに感謝しました。

初めて遭遇した災害に人の心のあたたかさ、人間は困難を糧にして生きる「力」をもっているのだとしみじみと感じました。

特に障害者として感じたことは「『災害弱者の支援は必要』と抽象論をいくらいってもダメ。命を守る具体策を考えること」が大事だということを震災を通して強く訴えたいと思いました。

#### 文集 「中越大震災に遭遇して」

平成17年4月23日 発行  
編集・発行 長岡老いを考える会  
事務局 長岡市柏町2-8-5  
TEL&FAX 0258-33-3579



